

進捗状況の概要（1 ページ以内）

平成 29 年度の事業の進捗状況について、以下の通り、概ね順調に進んでいる。

「学内の実施体制」については、平成 28 年度に構築した AP 事業の推進体制（学長をトップとしたステアリング委員会、AP 事業部プロジェクト推進委員会と 4 つの推進チーム）のもと、事業を実施した。平成 29 年度は、内部質保証総合活用スキームの構築・運用の起点となる「学修支援推進室（通称：OCU ラーニングセンター）」を正式稼働させ、人員スタッフの育成・学内関連部署との連携体制確立・環境整備も含め、学生の自律的学修を促進するための体制を確立させた。

「中心となる取組」については、〈OCU 指標チーム〉で、計画通りに経済学部での OCU 指標の先行導入および全学共通教育科目の成果配分値を決定、システム構築の取組を進めた。〈学修推進チーム〉で、学修支援推進室を中心に、学生の自律的学修を促すための取組を各種行った。具体的には、一般的な学修相談に加え、他組織との連携の下、学内ニーズの高い英語と数学の学修相談を開始した。3 月には、学生の利便性を考慮し、図書館に出張所を開設し学修相談を開始した。SA（スチューデント・アシスタント）制度を AP 事業への採択を契機に新設し、学修支援推進室が中心となり SA 業務のマニュアルや研修プログラムを開発した上で TA/SA を募集し（年 4 回）、教育支援者かつアクティブラーナーとなる学生の育成と組織化を図った。TA/SA が教員や学修支援推進室勤務の PD と協力し、自律的学修促進のための補助学修教材「学びの Tips」開発や各種の学修・教育支援セミナー・イベントの企画・実施、教育支援ツールの改良など、学生ニーズに基づく学修支援・教育支援の取組を進めた。〈教学 IR チーム〉は、各種調査を計画通りに実施・分析した。大学・高校・自治体・産業界等有識者からなる外部評価委員会を設置・開催し、委員からの指摘事項を次年度の計画に反映させた。〈FD・SD チーム〉は、FD 研究会等を計画通りに開催するとともに、SD の実施情報の集約化と精査に取り組んだ。

「取組の成果」については、経済学部での OCU 指標の試行的運用の開始と全学共通教育科目での OCU 指標配分値の決定をすることができたことで、OCU 指標による直接評価の全学的展開への基盤を築くことができた。学修支援推進室における学修相談ではのべ 201 件の利用があった。自主学修教材「学びの Tips」を計 17 種発行し、学修支援推進室や図書館に配架し広く利用を可能にした。学修・教育支援イベントも実施し（計 7 回）、Tips の活用方法も具体的に説明するなど、自律的学修や能動的学習型教育の促進支援を行えた。各種調査結果と学修相談を踏まえ、学生の学修状況の把握および本学での教育支援ニーズを把握することができ、次年度以降の取組企画に反映させることができた。これら全成果（や途中経過）を、全学 FD 事業（計 5 回）を通じて学内外に周知できた。

「補助期間終了後の継続発展に向けた取組」については、平成 31 年度に設置予定の「基幹教育機構（横断型教育機構）」への統合を見越した事務体制を敷くとともに、本事業の取組を確かに本学に根付かせるよう、学内の既存組織や授業との連携強化を図っている。現在は、学修支援推進室および教員と協力して行っている各種の取組を、学生自身によって自律的に進めることができる持続可能な体制を補助期間中に構築すべく取り組んでいる。

「学内外への波及効果」については、学内への波及効果は、第一に SA 制度の新設が挙げられる。本事業のセミナーやシンポジウム・FD 研究会等を全学 FD 事業として位置づけ、学修支援推進室が開発した学生の行動分析に基づく広報スキルを用いて、効果的に本事業の理念や取組を全学で共有・周知することで、全学的に質保証および学生の自律的学修促進に取り組む意識を高めた。また、上述の教材開発や学修相談・セミナー等実施により、学生の自律的学修も促進されつつある。学外に対しては、本事業 HP を作成し、本学 HP および AP 事業 HP へのリンクを通じて本学の取組を発信した。公開シンポジウム等の開催やシンポジウム等への参加・報告、他大学への聞き取り調査、取組成果の出版等を通じて、多数の大学や関係者に対し、本学の取組成果を公表する機会を創出し、課題と解決方法を共有した。また、オープンキャンパスでは、参加高校生とその保護者に対し本事業の取組を周知し、高大接続を意識して自律的学修への意識を高めることができた。